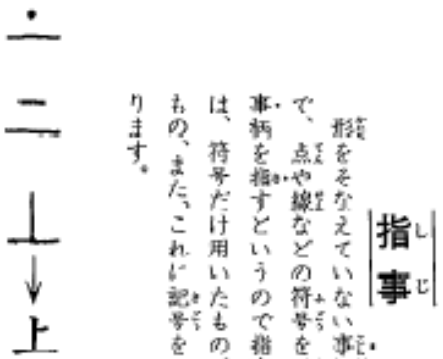
漢字の成り立ちについて

【漢字の成り立ちについて】

漢字が作られた最初のころは、目に見える物の形を簡単な絵に書きとった絵文字でした。しかし、人々の生活や文化が進むにつれて、絵では書き表せないことが多くなり、いろいろな工夫によって新しい漢字が作られるようになりました。このような漢字の作り方を調べてみますと、四つの作り方があったことがわかります。また同時に、すでに作られている漢字を、別な新しい意味に使って、使い方をふやしていきました。これに二つの方法があり、前の四つと合わせて「六書」とよばれています。

指事

形をそなえていない事柄は、絵に書けませんので、点や線などの符号を用いてこれを表しました。事柄を指すというので指事と言います。指事字には、符号だけ用いたもの、象形の漢字を利用したもの、また、これに記号をつけ加えたものなどがあります。



上

横線を引いて基準にし、その上の方に・やーやーをつけて上である事を示したもの。

下

同様に横線を基準にして下である事を示したもの。

大

人が両手両足を広げた形で大きい事を示したもの。

本

木の下の部分にしるしの一をつけて、木のもとである事を示したもの。

象形

象形は、物の形を象（かた）るという意味で、実際に目で見た物の形を写しとった簡単な絵をもとにして作られた文字です。

山

木

目

人類の文字の最初はすべてこのようなものであったと考えられますが、文字全体からみると極めてわずかしかありません。

末

木の上の方にしるしをつけて、先端（すえ）である事を示したもの。

会意

意味を会わせるということで、漢字を二字以上合わせて、新しい意味を表した文字です。象形や指事では表せないことを、象形や指事字を組み合わせることによって表したものです。

日＋月→明

日（太陽）と月とで、「あかるい」ことを表したもの。

田＋力→男

田で力を出して働く人「おとこ」。

亻＋木→休

田畑で働く人は木のかたわらで「やすむ」。

漢字の成り立ちについて

形声

形と声との両面を備えた文字という意味で、意味を表す部分と、発音を表す部分とを組み合わせたものです。

氵＋可→河

「カ」という音を表す可と川の意味の氵とを合わせた字。可という名の川（黄河のこと）。

糸＋工→紅

「コウ」という音を表す工と、色のしるしである糸とを合わせた字。工という名の色（赤い色）。

会意形声

形声字の中には、音を表す部分が同時に意味を表しているもの、つまり、会意を兼ねたものが多くあります。

亻＋動→働

人がからだを動かして「はたらく」。動は「ドウ」という音と同時に「うごく・うごかす」の意味も示す。

亻＋固→個

かたまりの意味の固と人とを合わせて「ひとりの独立した人」。固は「コ」という音と同時に意味も示す。

漢字の大部分は形声（会意形声）なので、音を表す部分と意味を表す部分とがありますから、初めて見る漢字でもある程度の見当をつけることができます。組み合わせの「才」からは音を、他からは何に関係のある字か想像できます。

転注

その漢字のもつ本来の意味をおし広めて、それと関係のある他の意味に転用した場合、これを転注と言います。例えば、「楽」という字は楽器の象形字で、本来は楽器の意味ですが、楽器によって演奏される音楽に転じ、さらに、音楽を聞けば楽しいので、楽しいという意味に用いられるようになりました。この場合、これを「成り立ちは象形で、用法は転注である」と言うのです。

楽

ガク（楽器）→音楽・楽団・管弦楽
←
ラク（たのしい）→快楽・行楽・楽園

悪

アク（わるい）→悪人・善悪・罪悪
←
オ（にくむ）→憎悪・嫌悪・好悪

多くは音はそのままで、意味だけ転用されるのが普通です。

妙

年の若い女性→美しい・すぐれた働き

道

歩くみち→人としてふみ行うみち・道徳

仮借

ある言葉を表す漢字が作れない場合、その発音と同じ発音の漢字を借りて表すことを仮借と言います。例えば、「一」は、針の形を象（かた）った針の意味の象形字でしたが、「数の意味のジュウ」を表す漢字が作れないので「針の意味の『十』」を借りました。この場合、「十は成り立ちは象形だが用法は仮借である」と言うのです。（後に、十にまったく意味の違った二つの用法があって紛らわしいので、区別するため針という字が作られ、十は数専用の字になりました。）

また、次のような場合に仮借することがあります。

❶ 「一・二・二」のように数字を改ざんする恐れを除くため、「壱・弐・参」を用いる。

❷ 外国語を発音通りに表すため。

例　印度（インド）、珈琲（コーヒー）。